Osaka University Knowledge Archive

Title	京団扇のデザイン
Author(s)	塚田, 章
Citation	デザイン理論. 2013, 61, p. 150-151
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/53542
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

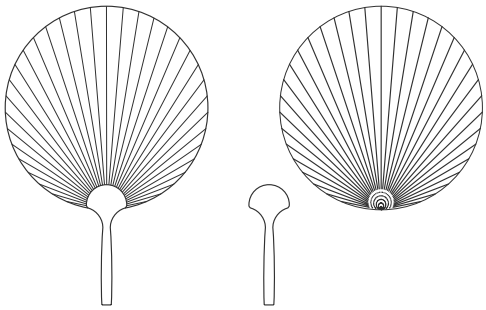
Osaka University

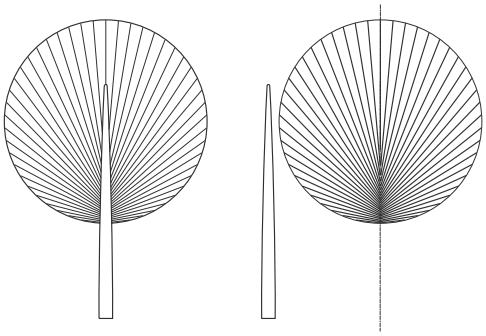
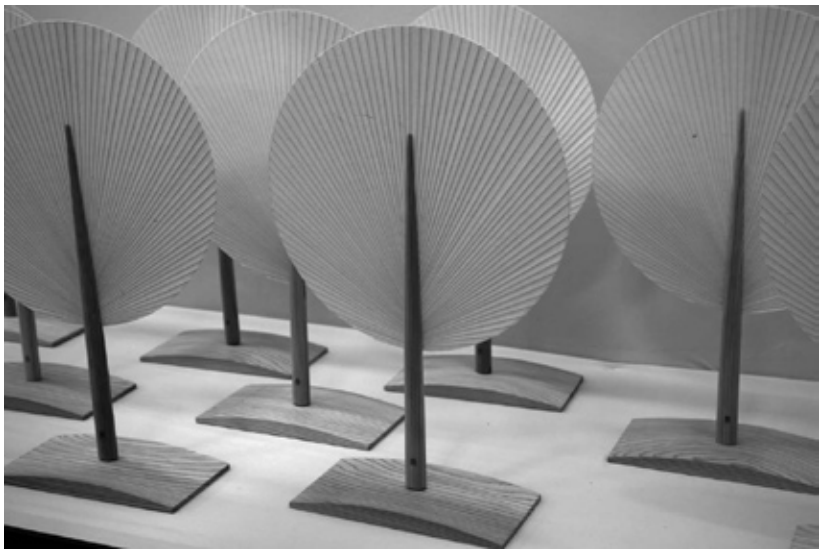
京団扇のデザイン

塚田　章／京都市立芸術大学美術学部デザイン研究室

京団扇とは一般的に差し柄構造の団扇を指す。真竹の骨を柄が取り付く部分（円弧）を起点に放射線状に形成し，両面に和紙を貼着して柄を差し込む構成を持つ。具体的には真竹の細竹（長方形の断面）を１本づつ放射線状に和紙の面上に糊付けし裏貼りを行う。次に表貼りが行われた後，ヘラを用いて団扇骨の際に筋をつける。次に周囲を切断し団扇の形に成型する。縁紙で囲繞すると共に柄挿入部分に適する当和紙等の重ね貼りを施して木製または竹製の柄を差し込み供するものである。

従来の骨群は柄が取り付く部分（円弧）を起点に放射線状に形成する事が基本となっている。しかし京団扇の場合放射線状に100本近く在る骨を柄が取り付く部分に集める都合上，骨どうしが接する円弧状起点で大きな面積が生じる事となり，其れ等を強度を確保して柄部分が銜え込む構造とした場合にかなり肥大した取り付け部となってしまうといった構造上避けられない欠点を有していた。



京団扇の意匠的特徴は，団扇本体と柄の接合部分の銀杏の葉の様な形状に在る。それは伝統的な意匠であり定着した意匠として広く馴染まれているが，その部分で和の印象を強く感じ取られる事となり，今日の洋風生活の中に位置付けようとした時にどうしても違和感が生じてしまう。銀杏の葉の様な形状を有しない，和を意識させない巾の狭い直裁なデザインの柄実現の要望は強くあるものの，骨群の構造からそれに応える京団扇を作る事が出来なかった。

上述した課題を解決するため，本デザインでは従来採られてきた骨群の円弧状起点を廃し，団扇の中心直線上に骨どうしが重ならない様に１本１本づつずらしながら設け，各起点より放射方向に配する構造を採っている。それによって柄が取り付く部分は巾方向で狭小化させることが可能となり，従来の京団扇では構造的に実現出来なかった直裁な細い巾の柄のデザインを可能とした。デザインイメージは森の樹木で，日常手元に近い所に飾れ，すぐに使えるというコンセプトで制作された。実制作は京団扇の職人により為された。